

高瀬幸途さん

(編集者・太田出版前社長)

「老人運動」の力で変革を!

太田出版という存在感ある出版社を育て上げつつ、一方で「社会運動が変革をもたらす」という信念のもと、多くの運動を組織し、下支えしてきた「編集者にして運動家」の高瀬さん。社長退任後のいまは何を考え、どんな活動をしているのか、近況と目指すところを聞いた。

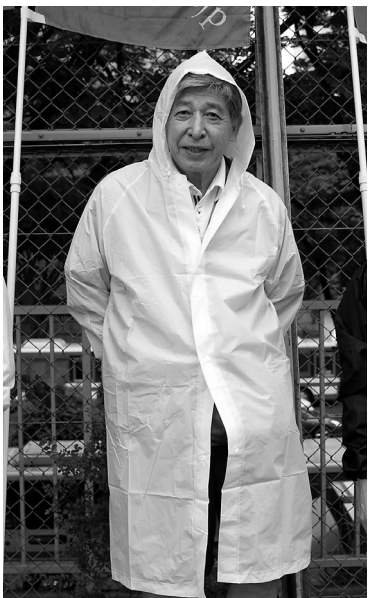
誰もが安く使える区営の墓地を作ろう

——東京・杉並区内に区営墓地の整備を目指す「みんなのお墓プロジェクト」を二〇一三年四月に立ち上げられました。

杉並区には都営などの公営墓地はなく、区民が新たにお墓を求める場合には、区外の霊園墓地が区内の寺院の高額な墓地しか選択肢がありません。そこで、身近にあって散歩のついでに行ける場所に、誰もが安く使える区営の墓地を市民の手で作ろうと呼びかけるも

ました。

しかしお墓に関しては、ひと言でいうと江戸時代の檀家制度の延長そのものといえる制度が残っています。墓地を持つている寺院が地主として金儲けをしている。そんな封建遺制に対する異議申し立てが、死者を扱ううえで第一歩ではないかと考えたのです。原発事故後、杉並区が東京電力から約六十億円で購入した四・四ヘクタールの運動場があります。付近にはすでに運



●たかせ・よしみち 一九四八年生、宇都宮生まれ。法政大学文学部中退。学生運動参加後、国内放浪や出版社勤務などを経て太田出版を設立。現代思想関連図書や雑誌『a1』などのほか『完全自殺マニュアル』『バトルロワイヤル』など、問題図書の刊行でも注目を浴びる。フェアトレードや柄合行人氏らとの社会運動など市民主体の活動に幅広く関わり、現在は市民セクター政策機構 (<http://www.opi.or.jp>) 発行『発売インストラクト』の「社会運動」編集顧問。写真(撮影・小原佐和子)は雨の中のデモ参加時のもの。

のです。地域政党の杉並・生活者ネットワークに企画を持ち込み、今年三月の区議会会で同党の女性議員が代表質問で提案しました。地方から出てきて結婚した女性を中心に少しずつ賛同の声が広がっています。

きっかけになったのは、東日本大震災(以下、三・一一)です。戦後生まれの自分としては初めて膨大な数の死者を目の当たりにし、その方々の魂の在処や供養はどうするのかという課題を突きつけられたように思いました。ちょうどそのころ、私は太田出版で宗教学者の山折哲雄さんと『往生の極意』という本を作っている最中で、自分なりに死について考えたりもしてい

動場や公園が少なからずありますので、生者の利害だけでなく死者のいる場所を身近なものにするために利用してもいいのではないかと思った。建築家に頼んで共同墓地の設計図も用意しました。

——地方から東京へ出てきた者にとっては、故郷の墓をどうするかというのは切実な問題です。決して安くはないお金をはたいて都内近郊の霊園などを購入し直すことには納得できない思いもあります。

お墓の問題というのは、その時々々の政治情勢や家々の利害によって決められていく側面もあります。たとえば歌舞伎界では、二〇一二年から一三年にかけて十代目中村勘三郎と十二代目市川團十郎が相次いで亡くなりましたが、中村家が築地本願寺で仏教式の葬式をあげたのに対し、市川家のほうは青山葬儀場で神道式で行ないました。市川家は屋号を成田屋というように、もともとは成田山新勝寺の系統ですが、江戸から明治になるときに起こった廃仏毀釈の影響で神道に変わった。代々の伝統を守る家と、変わる家に分かれることで歌舞伎界の温存をはかったのでしょうか。同じように現代の我々も新しい社会状況の中で選択を迫られています。これだけ少子高齢社会が進み、死者の数は